

# 現代における漫才の地域的な特徴とその要因

重田 葵衣 (小口広太ゼミ)

HS22-1097C

## 論文の目次

### 第1章 はじめに

- 第1節 研究動機と目的
- 第2節 研究方法とその対象
- 第3節 論文の構成と用語の定義

### 第2章 先行研究の整理と仮説の設定

- 第1節 漫才の形態
- 第2節 笑いの種類
- 第3節 仮説の設定

### 第3章 お笑いの歴史

- 第1節 お笑い第1世代
- 第2節 お笑い第2世代
- 第3節 お笑い第3世代
- 第4節 お笑い第4世代
- 第5節 お笑い第5世代
- 第6節 お笑い第6世代
- 第7節 お笑い第7世代
- 第8節 まとめ

### 第4章 漫才の事例

- 第1節 出身別に選定した芸人の一覧
- 第2節 分析

### 第5章 考察

### 第6章 おわりに

注、参考文献、参考URL、その他参考資料

## 論文の要旨

### 第1章 はじめに

筆者はお笑いが大好きで、毎年200回ほど劇場に足を運び、お笑いライブ運営のアルバイトも行っている。数多くの芸人のネタを見てきた経験から、地方ごとの特徴を分析したいと考え、研究テーマを「お笑い」に設定した。

今回用いた研究方法は、映像データの分析で

ある。本研究では対象を漫才に絞り、地方ごとに15～20組の芸人を選定して、計430本の漫才を視聴した。

### 第2章 先行研究の整理と仮説の設定

漫才の形態は、掛け合いのみの「しゃべくり漫才」と、設定を決めて役を演じる「コント漫才」の2つに分類できる(太田2016)。

そして、その長い歴史と、関西人特有のキャラクターや、関西弁の存在により、関西ではしゃべくり漫才が活発で、それに対して関東では、言葉の違いが影響しにくいコント漫才が発展している(埴2019)。

また、笑いの種類について、コミュニケーションの中で生まれる笑いを以下のように分類した(志水2016)。

A: 本能充足の笑い B: 期待充足の笑い

C: 優越の笑い D: 不調和の笑い

E: 価値低下・逆転の笑い F: 協調の笑い

G: 防御の笑い H: 攻撃の笑い

I: 価値無化の笑い J: 緊張緩和の笑い(強)

K: 緊張緩和の笑い(弱)

さらに、東京をサムライのタテ型社会、大阪を商人のヨコ型社会と捉えた上で、タテ型社会では権威や秩序を重んじるため、東京には「攻撃」の笑い、ヨコ型社会では個人間の友好関係を大切にするため、大阪には「協調」としての笑いが存在する(井上2019)。

以上から設定した仮説は以下の2点である。

- ・関東では「コント漫才」、関西では「しゃべくり漫才」が活発になっているのではないかと。

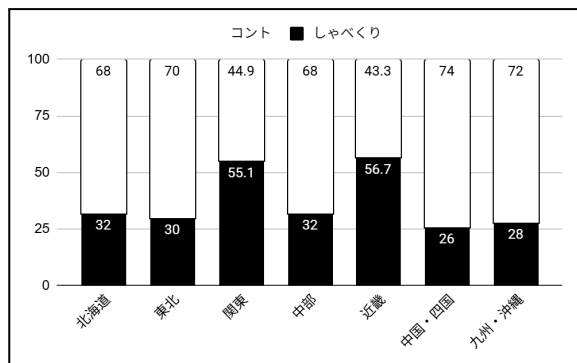
- ・関東には「C: 優越の笑い」と「H: 攻撃の笑い」、関西には「F: 協調の笑い」が多いのではないかと。

### 第3章 お笑いの歴史

戦後から現代までのお笑いの歴史を7つの世代に分類し、特徴を位置づけた。本研究では2000年代以降の第5世代から、現在の第7世代までの芸人を取り上げた。

### 第4章 漫才の事例

図表1 漫才の形態の割合 (%)



図表2 笑いの種類の割合 (%)

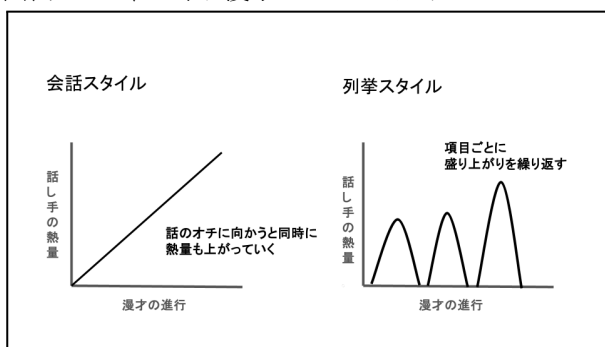
	C	D	F	H
北海道	20.3	31.3	9.8	15.4
東北	23	33.7	10.8	15.5
関東	15.9	32.8	9.7	14.7
中部	10.6	44.2	7.2	16.8
近畿	16.5	39.1	11.9	15.6
中国・四国	14.6	39.9	6.9	26.9
九州・沖縄	24.7	31.2	6	13.3

漫才の形態は北海道、東北、中部、中国・四国、九州・沖縄地方出身の芸人による漫才ではしゃべくり漫才とコント漫才がおおよそ3:7、関東、近畿地方出身の芸人による漫才ではおおよそ5:5の割合となり、仮説と異なる結果になった。

さらに、笑いの種類はすべての地方でDが最も多く、続いてCとHのどちらかが2番目と3番目を占めるという結果になり、こちらも仮説と異なる結果になった。その他の項目も大きな差はなく、特に目立った特徴のある地方はなかった。

### 第5章 考察

図表3 しゃべくり漫才の2つのスタイル



関東でもしゃべくり漫才が活発だった理由として、標準語の言葉の弱さをカバーできる「列挙スタイル」の漫才が増えたからだと考えた。実際に関東地方でのしゃべくり漫才のうち列挙スタイルは49%、近畿地方では20%であった。

次に、関西でもコント漫才が活発だった理由として、賞レースで結果を残すことを重視する芸人が増加し、競技用の漫才が多く作られるようになったからだと考えた。賞レースでコント漫才が有利な理由は、以下の2点である。

- ・役に入り演技をしながら進められるため、設定やテーマが多様になる。
- ・長い説明なしですぐに本題に入れるため、最初の笑いが起きるまでの時間を短くできる。(実際にしゃべくり漫才において最初の笑いが起きるスピードは平均50.25秒だったのに対し、コント漫才では平均15.5秒だった)

関東と近畿以外の地方では、コント漫才が全体の7割を占めていた。特にこれらの地方では、その土地の特産品や有名人など紹介するという内容が多く見られた。その出身地について紹介するという目的に適していることから、コント漫才が多く選択されていると考えた。

また、笑いの種類が全国的に均質化した理由として、笑いに対する社会の変化が関係していると考えた。近年ではコンプライアンスやハラスメントへの意識が高まり、求められる理想像や、視聴者の需要も変化した。社会規範や流行を意識し、それに従った結果、特徴がなくなり、均質化しているのではないかと。

### 第6章 おわりに

本研究のテーマは現代における漫才の地域的な特徴についてである。結果的にどちらの仮説も立証することはできず、明確な特徴を見つけることはできなかったが、現代の様々な要因からお笑いが均質化していることを明らかにできたのは大きな成果であった。

今後は、漫才の競技化、笑いの均質化がより加速していくと予想できる。そんな中でも個性を出そうと奮闘している芸人や、世界観を貫く芸人に注目し、期待したい。

### 主要参考文献

- 太田省一(2021)『すべてはタモリ、たけし、さんまから始まった』, 筑摩書房。  
 志水彰(2016)『笑い/その異常と正常』, 勁草書房。  
 埴宣之(2019)『言い訳 関東芸人はなぜM-1で勝てないのか』, 集英社。